

# 「始まり」について

田中祐次



「シンデレラは、王子さまと結婚して、しあわせにくらしめた」

お話を聞いていた子どもが、そろそろ眠くなってきているところなら、これで無事めでたしめでたしとなるのだが、子どもがますます眼のさえてきているときには、これで話が終りになるとはかぎらない。

「それから二人はどんな暮しをしたのかしら」「いじわるなお姉さんたちや、ママ母は、もうほんとうにいじわるをしなかつたかしら」

映画やテレビ・ドラマを見終わったとき、その結末が、またつぎの新しいドラマの始まりになるのではないかと考えて、想像をたくましくするのは、一人私だけではないのではないか。ハッピー・エンドで結ばれた二人が、物語の中で単純にめでたしめでた

しというほど仕合せな生活をはたしてほんとうにおくることができるかどうか、そんなことを考えるのは、やはりあまのじゃくというべきなのだろうか。

人の人生は、山あり谷あり、仕合せなときもあれば不仕合せなときもある。楽しいこともあれば苦しいこともある。物語の中の二人がやっと得た仕合せも、それが永遠に続くかどうかは誰も保証しかねることである。

今の世の中は、そんな一時の仕合せでいい気になっているわけにはいかない。結ばれた二人が明日から住む家は、どんなところなのだろうか。六畳一間のアパートかもしれない。愛の結晶が誕生すれば追い出されるかもしれない。夫は交通事故にあうかもしれないし、妻も病気になるかもしれない。でも、苦勞して結ばれた二人は、それを愛の力できつと克服してくれるだろう。いやは

や、なんとおせっかいな気のまわしようであろう。

「始まり」についての一文が、ついつい「終り」からの書き出しになってしまったが、「始まり」には「終り」がつきものであることを考えれば、これも仕方ないのご理解いただきたい。

ところで、物語の終りがハッピー・エンドであることが好まれるのは、苦勞した結果として得た喜びが、いかに大きいかを人々が知っていて、誰もがそうした結末に共感できるからであろう。

物語の作者にしてみれば、こうした、人々の共感をより強いものにするためにこそ、物語が必要であり、そこにテーマがあるのである。

年度という制度がいつのころから日本の行政にもちこまれたのか、私はくわしいことを知らないが、日本には、一月と四月という二つの始まりがある。暦の上での一年のはじめは一月であり、人々は一年の計は元旦にありとして、古来からこの日を年齢の節にもしてきた。最近では、満年齢がすっかり普及して、元旦が「お年取り」の日という実感はなくなってしまったが、それでも、元旦はすべての新しい出発の日として、心をあらたにする習慣は変わらないようである。

私たち教育にたずさわる者としては、仕事の上での年初めは、むしろこの四月という月にあるように思う。学年をはじめは、子ど

もたちにとっても、教師にとっても、まさに、新しい年の始まりに感じられる。入学があり、進級があり、新しい出会いがある。誰もが、期待とあらたな覚悟を秘めてこの始まりにのぞむ。

一年間という時間的経過は、太陽系の中で地球が営む一つの周期にすぎないのであるが、地球上のすべての自然が、これによって営みを繰り返し、その繰り返しだが、多くの変化を生み出すのである。自然の中に生活するすべての生物にとって、去年とまったく同じ一年はありえない。

人は、ことあるごとに、ものごとくに節を設けて、「始め」と「終り」を意識しようとする。成長を願い、それを積極的にはかろうとする人間の本性が、ここに感ぜられる。

「始まり」が存在するところには必ず「終り」がなければならぬ。「終り」を感動的に迎えようとするとき「始まり」における計画立案は、ちょうど物語作家のテーマ設定にも匹敵して重要である。テーマに一応の結論を見いだしたとき、それが「終り」である。その終りが一年という区切りの中で迎えられるとすれば、こんな仕合せなことはない。「終り」はつぎのテーマへの出発点なのだから。

(信州大学)